

## 卓 抜 と 不 幸

バルザック：『いなかミューズ』について

中 村 加 津

Balzacが「homme supérieur に捧げる」(Pl. XI, p. 935) とする *Physiologie du Mariage* (1824-9) の中で、男子に伍する教育を受け最高度の能力を持つ女性は *femme supérieure* と名付けられた。この語が目立って使われている *La Muse du Département* (1843-4) においては、その執拗とも言える多用のため女主人公 Dinah de La Baudraye に対する作者の揶揄が感じられる。事実、『人間喜劇』の中で女性の大作家として扱われる Camille Maupin にはこの語は使われず、彼女は「20世紀にせいぜい20人出るか出ないかの grandes femmes」[*Béatrix* (1838-44), Pl. I, p. 688] の一人に数えられている。Dinah は作者からこのような名誉も、また幸せな生涯さえも与えられなかった。本論は、彼女の *supériorité* と不幸との関係の面からこの作品を分析することをその目的とする。

### I *Femme supérieure* の俗物性

*La Femme supérieure* の題名を最初に与えられた作品は、*Les Employés* (1837) である。しかし夫を成功させようとする野心的な *femme supérieure*, Célestine Rabourdin の計画は挫折し、また、作品の主題が夫の職場の人間関係へと変更されたので題名も変わった。夫の失脚が決定的となった時 Célestine は彼の真の人格を理解し野心を捨てる。この時彼女は自分が *vulgaire* な女であることを否定する (Pl. VII, p. 1098)。彼女はもはや *femme supérieure* と呼ばれていない。

*La Muse* の場合は次のようである。

ほどほどに財産を持つ庶民の出の優れて賢い Dinah Piédefer はブルジュで一流の女学校の中で才媛の名をほしいままにしている。この榮譽を永続させるためには、富と地位が必要であることを17歳の Dinah は早くも理解し、幸せな未来を自ら獲得する計画を立てこれを実行する。まずカルヴィン派からカ

トリックに改宗することにより枢機卿のお覚えを得、そして枢機卿の仲介で玉の輿に乗ることに成功する。もっとも、由緒ある名を持つ夫の de La Baudraye 氏もなりあがり貴族で、要領のよい役人であった先祖が名と土地をルイ十四世から賜ったのである。作品の冒頭には彼が住むサンセールがロワール河畔に続く山並みの最高峰にあり、またその山の頂上に町があると描写され、やがて彼はそのさらに二キロ上流にアンジーの城を買うというふうには彼の上昇志向が暗示されている。この城に客を招いて、Mme de La Baudraye はサンセールの町で *femme supérieure* の名声を馳せる。

しかし Lousteau を追ってパリに出た時、彼女は *supérieure* と呼ばれなくなる。夫ではない男と同棲し、その子供を生んだことは社会との断絶を意味する。サンセールでの彼女の崇拜者の中で最も献身的な愛を捧げる de Clagny が彼女を追ってパリに来るのは家に帰るよう説得することが目的であるが、それは世間体を守るためである。彼女は答える。「幸せと体面を一致させることのできる女性だけに許される世俗の利益に私は永久にさよならしたのです」(Pl. IV, p. 755)。また Lousteau にも、「わたしって何なの。世間の外に出た女よ。(…) わたし達は社会の協定の外に生きているのではなくって？」(Pl. IV, p. 772) と言う。社会が最も許さないこと、それは法に触れることである。法を基盤とする結婚を無視することは従って世間から脱落したことになる。このような女性が *supérieure* であることは出来ない。世の妻たちより低い地位に転落したことになる Dinah にこの形容詞は相応しくない。

ここに世間と言っているのはパリの社交界と殆ど同意義と解してよいことは、Rose Fortassier の *Les Mondains de la Comédie humaine* における分析を見れば明らかである。《le monde est la société par excellence》(p. 495) と述べている。La Muse に描かれている1840年頃の社交界で力を持っていたのはブルジョア出身の貴族である。*femme supérieure* が基盤としているのはそのような世界である。夫の失脚により富を失った Célestine と同じく、恋愛により信用を失ってこの世界での野心を捨てざるを得なくなった Dinah は、始めてその虚栄に満ちた俗悪さを明からさまに指摘する。「社会は虚栄心によって、見栄によって私達を繋ぎとめるものよ」(Pl. IV, p. 757)。また Célestine と全く同じように、《Je ne serai pas vulgaire》(Pl. IV, p. 775) と言っている。

## II *Femme supérieure* と *petit homme* の戦い

作者の de La Baudraye 夫妻への呼び名は注目に値する。男爵、さらには伯爵の位や、土地や城の財産はすべて夫の努力と才覚のみにより得られたもので

あるのに、常に Mme de La Baudraye と敬意をもって呼ばれるのは妻である。城が手に入れば直ちに la châtelaine, 夫が伯爵になると早速 la comtesse と作者は呼んでいる。一方夫の名の前には執拗に petit がつけられる。le châtelain は一度もなく、le comte de La Baudraye は最後の場面に一度だけである。それよりも作者が好んで用いるのは、le vigneron, le petit homme とか nain, avare, insecte などのあだ名である。この事実は何を意味するのだろうか。

17歳の時に、44歳の虚弱な小男と結婚した大柄美人の Dinah は、当初は夫を思いの侷に操縦できると思っていた。しかしその当ては外れる。物語の冒頭、結婚の五年後、すでに夫は領地を驚異的な早さで広げること成功しているが、「その喜びがディナーの苦しみと埋め合わせになったとは確言できない」(Pl. IV, p. 639) と書かれている。彼女は幸せを求めての十年以上の模索の後にも、ますます幸せから遠のいているばかりである。

Bernard Guyon は Garnier 版の解説に、「ドゥ・ラ・ボードゥレーが勝利者」であり、「ショーの実際の進行係である」(p. 97) と書いている。けれども彼は Balzac の作品によく見られる華々しい活躍で勝利を得る主人公ではない。吝嗇漢 Grandet や Gobseck の仲間であることはどの解説にも指摘されているし、また病弱の肉体を大事に使って思いがけず生き長らえているところは、Balzac の父の持論や *Les Chouans* の老骨董商の哲学の実践者である。「ラ・ボードゥレー青年が生きたのは、修道士的規則正しさ、運動の節約のおかげである」(Pl. IV, p. 633)。このような男と若い野心的な美人との、サンセルの人々に《mariage insensé》(Pl. IV, p. 636) と喧伝されるこの結婚の真相は Balzac 特有の謎めいた表現の裏に見え隠れしている。*Physiologie* の「第一の命題」を思い出せば更にはっきりと見えてくるであろう。「結婚とは絶え間ない交戦である」(Pl. XI, p. 918)。若さ、美しさ、魅力、頭脳、機転、感受性、教養などあらゆるものを兼ね備えた妻と、その全てを持たない夫との戦いである。妻には更に詩作の才能さえある。また夫は愛する能力さえ備えていないのであるが、その無能力さは肉体にまで及び性的不能者であるらしい。

生まれながらこれほど不利な条件で戦うことを余儀なくされている男が結婚して、しかも相手に勝つには、どんな方法があるだろうか。ここで Balzac が持ち出すのは、徹底した経済性である。このような場合の経済性とは何か。自分は何も消費せず、相手の武器を利用する方法である。戦い方をこうと決めれば最も有利な戦いを展開できる相手は自ずから決まる。最も多くの武器を持つ相手である。ここで結婚が戦争と異なっている点に注意しよう。結婚とは戦いであると同時に共同作業である。二人が向き合えば戦いであるが、世間を相手

とすれば協力者となる。世間との戦いにおいては同じものを目的としていなければならない。彼らは共に地位向上という野心を持っていた。Dinah Piédeferは彼の望みにぴったりの結婚相手であったわけである。枢機卿が彼女の嫁ぎ先を探していた時、どの家庭でも「シャマロール女学校のお嬢さんたちの中で一番の才媛で通っている公女然とした風格の娘」(Pl. IV, p. 635)に恐れをなして敬遠した中で、de La Baudrayeだけは自ら名乗りを挙げた。「枢機卿はドゥ・ラ・ボードゥレー氏に出会えてとても嬉しかったが、ドゥ・ラ・ボードゥレー氏は枢機卿のお世話で妻を娶れたのがもっともっと嬉しかった」(Pl. IV, p. 635-6)。この時点ですでに彼の勝利はほぼ決定的である。後は作戦を実行するだけである。

彼女は徹底的に利用される。世間の目に彼女が立派に見えれば見える程彼には有利である。そのため彼は姿勢を低くする。葡萄の収穫以外には何の関心も示さないふりをする。高尚な学問の話になれば逃げ出す。どの女性よりも抜きん出ているので目立つ彼女の所には多くの男性が集まる。その男達を利用して彼は地位や財産を獲得するのである。

この夫婦の戦いで妻が決定的に不利であるのは、相手の戦力の把握の点で夫にたち遅れたことである。彼の性格について Dinah の崇拜者であり懺悔弔問僧でもある l'abbé Duret は彼女に幾度となく警告する。「憎しみは小心者に特有なもので、復讐は偉大な心の持ち主が従う法則の結果です。神様は復讐されるが憎みはされない。憎しみは狭い心の悪徳です。(…)だからドゥ・ラ・ボードゥレー氏を傷つけないように気をお付けなさい」(Pl. IV, p. 664)。愛に無関心な夫は憎しみも不可能だと考えている妻は、この警告を理解しない。妻が雄弁であるのと同じ程度に夫は寡黙である。彼は猫のような眼で妻を見ているが、妻は自分の虚栄心を満足させることに気をとられている為に相手を知る機会を逸する。その上夫は賢明にも妻の母親のものをも含めてすべての財産を握り、妻は夫に与えられる金銭以外には自由になる金を全く持てない。彼女の自由意思はいかにも尊重されているようでありながら、実はその範囲は夫の野心を貫徹するために有利な部分に止まっていて、それ以上には決して出ることがない。妻は気持を夫に伝えようとしても「大理石を叩いている」(Pl. IV, p. 651) 感じがするばかりである。同じ野心を持つ二人が心を合わせて一緒に梯子を上るのではなく、夫は妻を利用するだけで、共同作業を決してさせない。夫に連れて妻の社会的地位が上がったとしても、妻は達成感を味わうことはない。Dinah の不満はつものるばかりである。彼女は女としての最後の武器さえ夫には使えない。夫に欲求がないからである。そしてついに精神の病気に罹る。

### III 病の治療のための文学

Balzac は Dinah を世俗的な野心の持ち主として軽蔑してはいない。「彼女の表面的な *supériorité* は偽りのもので、隠れた *supériorité* が真実のものであった。才知が短所となって滑稽に見えても、心の長所において偉大であった」(Pl. IV, p. 651)。Balzac は『人間喜劇』の中で常に敬意をもって描かれる宗教、法律、医学に従事する男性たちを彼女の病の治療に当たらせる。まず司祭は彼女に詩歌の創作を勧める。「悪い考えを詩に転換させる」(Pl. IV, p. 657) わけである。その効果が決定的になりかけた時、夫の沈黙の抵抗に会い、彼女は諦めざる得なくなる。何故夫が反対したのか。先にあげた司祭の忠告を参考にすれば、妻が夫の不能を暴く詩を種にして栄光を得たことに傷つき、憎しみを露わにしたものととれる。偉大な彼女は夫の愛の不能への復讐の意味で詩を書いたとすれば、狭い心の彼は憎しみを抱くのである。しかしそれよりも自分の密かな計画の遂行を彼女に邪魔される結果になるからとも考えられる。その秘密を Dinah は見抜けない。しかし「ちびのドゥ・ラ・ボードゥレーが目を閉じてソファに座り、落ち着き払って彼女の言葉を聞いている」のを見て「ディナーは書いたのは間違いだったことを悟った。彼女はもう決して詩を作るまいと決心しそれを守った」(Pl. IV, p. 665)。

司祭の死後、より世俗的な第二の治療法が医師により考え出される。恋愛である。Bianchon は友人の Lousteau に彼女を誘惑するよう唆す。これは夫の思う壺であって、その結果彼女ではなく夫が最後の勝利を収めることになる。

Balzac はこの作品では心の問題が大きい役割を果たすと言っている (Pl. IV, p. 636)。パリに出た Dinah は一切の物質的な欲求を捨てる。この部分の彼女が作品中で最も読者をひきつける。Bernard Guyon によれば「恐ろしく、見事な恋の物語である。気高くてグロテスクな、輝かしくて屈辱的な情事」(Guyon, op. cit., p. 87) である。彼女は Lousteau の幸せのために身をつくす。「彼の幸せがわたしの罪滅ぼしになるでしょう」(Pl. IV, p. 759) と自己弁護する。文学をするのも彼を助けるためである。彼女が書き、Lousteau の名で出版するもので生活費を稼ぐ。「四年後にはこの女の愛は (...) スタンダールが初めて完璧に分析したニュアンスの全てを備えたものとなった。 (...) これが本当の愛と言うものにちがいない。あらゆる愛し方で愛するのである。心の愛、頭脳の愛、情熱の愛、きまぐれの愛、趣味の愛」(Pl. IV, pp. 771-2)。子供を生んで豊かな母性愛が加わった Dinah は、恋人への愛に母性愛さえも加える。「わたしは彼の母になるの」(Pl. IV, p. 774) と言う。

当然のことながらこれは報いのない愛である。相手が Lousteau である。de La Baudraye が土地にしがみついた俗物であるとすれば、Lousteau は文学の世界の俗物である。Dinah にとって真実であるものが、彼にとってはお芝居にすぎない (Pl. IV, p. 731)。 *Physiologie* の中に、「愛において、あなたが与え過ぎると充分なお返しをもらえないことは確かである。子供にありったけの愛情を見せてしまう母親は子供を恩しらずにしてしまう。恩しらずは恩返しのできない事の結果であるらしい。愛される以上に愛する女は虐げられるのが当然である」 (Pl. XI, p. 982) と書かれている。また優れた女が優れた男を必ずしも好むとは限らないというのも Balzac の持論で、Bianchon と Lousteau のどちらもが Dinah の恋人になる可能性があった時にも「彼女自身が偉大であるので偉大よりはエスプリの方を受け入れやすかった。愛は通常類似よりはコントラストを好むものである」 (Pl. IV, p. 719) として作者は Dinah に Lousteau を選ばせている。

#### IV 子供の役割

さて de La Baudraye にとって妻の恋物語はどのような意味を持つだろうか。優れているにも拘わらず不幸の底に転落した妻とは反対に、人々の軽蔑の的にしかならない不運を背負って生まれた夫はどこまでも上昇する。待望の子供が出来た。立派な男の子が二人までも。勿論妻の世間体は保っておかなければならない。彼の目的は世間を見返すことなのだから何ひとつ後ろ指をさされてはならない。

このブルジョアの勃興期には家庭における子供の重要性が増大して来ていた。Laure Surville の Balzac 伝に「最近では、子供が家族の中で重要視されていることが多いが、私達の生まれた頃にはそのようなことはなかった」 (p. 4) とある。ブルジョアは、自ら獲得し増やした財産や地位を継承し更に発展させる為には優秀な子孫を必要とする。de La Baudraye は子供の出産と教育にはパリの文化が最適であるという理由で、妻をパリに住まわせているのだと宣伝している。

Dinah が生んだ Lousteau の子供を夫の戸籍に入れるのは、医者と司法官の仕事である。医者 Bianchon は de La Baudraye 夫妻の秘密をいち早く見破り、妻の病気を治すための恋愛は夫にとっても有利であると診断した。その後始末として、生まれた子供の身分の保証をしてやることは義務と言えるだろう。また誠実に Dinah を愛している司法官 de Clagny は彼女の体面を保つために全力を尽くすのである。そしてこれらはすべて夫のみを利する結果となる。

夫がパリに来て突然姿を現した時、彼女は「夫権の前に自分が小さく感じられ (...) この小柄な老人の前で顔を赤らめ」(Pl. IV, p. 768) てしまう。彼は更に父権さえ手に入れたのである。死なない限りは、法に保証された二つの権力、夫と父の権力を最大限に利用するであろう。妻とその愛人が、彼の死後に結婚しようともくろんでいることを察している彼は、益々若返った自分の姿を見せて彼らの希望を打ち砕く。これがきっかけで打算的な Lousteau の気持はますます彼女から離れるのである。いかに愛する彼女の目にも、男の心の離反は覆うべくもない。

彼女が子供の世話をしている場面は全く描かれていない。彼女の母が代わってしている。本来子供に向かうべき Dinah の愛情は恋人に向かっているのである。彼女と結婚するのでない限り Lousteau に子供は必要でない。なぜなら子供は法に守られて社会に正当な立場を獲得してこそ幸せに育つものである。また、子供は社会を存続させるために必要なものである。社会の外にいる恋人たちにはむしろ邪魔者である。恋人と別れてしまってから彼女は初めて「裏切られた慈愛のすべてを子供達に向けた」(Pl. IV, pp. 783-4)。

法に守られているとは言え実体のない夫婦を繋ぐものとして子供が利用される。一方、逃げ腰の恋人の愛を繋ぎ止め、ふたりの共同生活を継続させるものとして彼女は文学の創作を使った。Lousteau には頭脳から生み出した子供を与えたのである。それでは実際の子供と頭脳の産物である文学は相容れるものであろうか。Dinah の詩作に夫が無言の抵抗を示した意味をもう一度考えよう。単なる噂に過ぎなかった自分の不能が妻の詩による告白を得て立証されれば、妻の生んだ子供を自分のものと偽ることが不可能になってしまう。これを彼は恐れたのであろう。しかしそればかりではない。彼が抵抗したのには、更にもう一つの理由がありはしないか。詩という子供に彼女が満足してしまっ、本当の子供を生む意欲を失うことを彼は恐れたとも考えられる。また、Dinah の恋愛を阻止するためには力をつくした司法官 de Clagny が、彼女の詩集の発行を阻止せず、これには積極的に協力したことの裏にも、Balzac が子育てと詩作が共存し得ないと考えていたことが窺える。de Clagny 自身が意識していたかどうかは別として、この役割は結果として de La Baudraye が虚偽の子供を持つことを阻止することになる。彼の強い意志の前にこの計画が挫折したので、de Clagny はせめて法的にだけでも形を整えて、Dinah と子供たちを社会から守った。しかしそのため彼は司法官でありながら虚偽の戸籍造りを率先してするという罪を犯すことになる。de Clagny に好意を持つ作者は、前もってこの善良な司法官に詩集の発行の仕事割り当てて後の罪を軽減してやった

のではなからうか。

Dinah を夫の許に引き戻した力は子供にあったのではない。母が、司祭に導かれ愛情の目で観察しながらチャンスをつかんで、娘の「目から鱗を落としてやる」(Pl. IV, p. 777) ことに成功するのである。公序良俗に従った平和な生活に戻ることに Dinah が同意すると直ちに司法官が「仕事の仕上げをする」(Pl. IV, p. 777)。彼女が名誉を回復するためには、夫の許に帰って法に違反しない生活をしているところを世間に見せ、更に敬虔なキリスト教徒として慈善事業に励まなければならない。パリでの彼女のサロンは成功し、とりわけ信心深い女性たちの間で人気を博するまでになる。すべて de Clagny と母の援助のお蔭である。彼女は *une femme hors ligne* (Pl. IV, p. 784) となり、*vraiment supérieure* (Pl. IV, p. 783) となる。この呼び名は *La Femme Auteur* (未完, 1847-8 と推定) の中で母性の権化のように描かれている Mme Malvault に与えられているものと同じである。しかし Dinah は彼女のように母親として落ち着いたとは考えにくい。

## 結 語

Dinah の心の病を最初に治そうとした Duret 神父は彼女の詩を見て効果のありすぎたことに驚く。「もうおやめなさい。あなたは女ではなく詩人になってしまう」(Pl. IV, p. 661) と言わなければならない。次の Bianchon 医師の処方箋は不倫を勧めるものである。それは司法官の違法行為で償われなければならない。誰もが危険な処方しか下すことが出来ないのは何故か。病根は精神、肉体両面で夫となる資格のない男に彼女が嫁した所にある。そこにメスを入れることを法が阻止している。彼女の病はしたがって根治できない。

この作品の最後の行と、*Mémoires de deux jeunes Mariées* (1841) のそれとは類似し、且つ対照的である。*Mémoires* を締め括る夫への手紙の中の Renée de L'Estorade の《*je veux voir mes enfants ! Amène mes enfants au-devant de moi !*》(Pl. I, p. 403) という言葉には、彼女の母親としての強い自信がにじみ出ている。一方、*La Muse* の最後の《*voici mes enfants !*》という de La Baudraye と、それに続いて《*Ah ! voilà nos enfants*》(Pl. IV, p. 791) という意地悪な彼のいとこの傍には Dinah はいない。またこの少し前、Dinah が夫の許へ帰る時から、夫の名の前に作者は *petit* を付けることを止め、最後には *le comte* を付けていることにも注目すべきである。

Dinah が土地持ちの de La Baudraye に嫁したのは土地が目当てではない。財産と、それにより得た地位を礎にパリの社交界に華々しくデビューするため



である。この世界での榮譽を夢見ている *vulgarité* が夫につけこまれる弱点となったのであった。パリで得た子供は土地を相続させる目的で農民的 *vulgarité* を持つ夫に奪われた。大地主となった夫とその後継者となる筈の子供たちで構成する世界の中に彼女の占める位置はありそうもない。また彼女は頭脳の産物である文学も *mondain* である愛人に奪われてしまっている。彼女には何も残されなかった。

いや、彼女には真実の愛が残っている。別れた後も *Lousteau* への魅力に負けそうになる彼女が描かれていることからそれは十分に憶測できる。しかしこの愛を知ってしまった女性は決してこの世での幸せを得られることのないことを『人間喜劇』の中のあまりにも多くのヒロインが証明している。彼女は *Camille Maupin* が名付けた *grandes âmes* [*Honorine*, (1843), Pl. II, p. 597] のひとりになってしまったのである。『人間喜劇』の世界では、美や愛は宗教や医学の施す善行とも、法律の守る正義とも別の法則の下にある。だからここには僧侶の恋愛はなく、司法官はいつも片思いを余儀なくされている。

子供を生まれ、命を永らえさせる医学や、正義を守る司法は社会の存続のためにある。社会は個人の幸せの追求には無関心に自らの存続のみを願っている。*Balzac* は全『人間喜劇』を通してこのことを訴えているとも言える。願望を社会の法則の範囲内に止めておくだけで満足できる凡庸な人々にのみこの世の幸せが与えられる可能性が存在することをこの作品もまた示していることは明らかであろう。

(F. 1958 関西外国語大学講師)

---

引用文の末尾の頁数は、その出典中の頁数を意味する。

バルザックの作品はすべて、*Pléiade* 新版の *La Comédie humaine* をテキストとした。作品名の後ろの括弧中の年号は、この版の各作品の末尾に記された制作年を表す。引用文の末尾の括弧中の Pl. はこの版を、またその次のローマ数字は巻数を示す。

その他に引用された参考文献は以下の通りである。

- \* Bernard Guyon, *Introduction à La Muse du département*, Garnier, 1970.
- \* Rose Fortassier : *Les Mondains de la Comédie humaine*, Klincksieck, 1974.
- \* Laure Surville née de Balzac : *Balzac sa Vie et ses Oeuvres d'après sa correspondance*. Librairie Nouvelle, 1858.